

日刊 動労千葉

84. 11. 10
No. 1789

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五（六・公衆）〇四七二（二二）七二〇七

臨調・行革粉碎！ 三里塚ジェット闘争勝利！

労働組合の名をもって首切りを強制する動労「本部」革マル

動労「本部」革マルは、十万人首切りの突破口をなす「三本柱」攻撃に対し、当局の「これをのまなければ雇用安定協約を破棄する」とのどり喝を受け入れ、鉄労、全施労とともに妥結し、率先して自らの組合員を首切り要員として差し出そうとしている。
まさに国鉄情勢は重大な局面に突入した。「11・10国鉄労働者集会」を突破口に猛反撃にうってでなければならぬ。本号では、「動労（革マル）の職場と仕事（拠点）」を守るため」と称し、組合員を犠牲にしている事実について明らかにしていこう。

首切りをすすめる動労「本部」革マル
動労「本部」革マルは、「三本柱」妥結の恥ずべき裏切りについて「雇用安定協約の存続をかつとった」「成果だ」と吹聴している。
これは組合員を欺くためのデマである。
なぜなら、動労革マルが「成果」とする妥結のなかみは、「三本柱の有効な活用が前提」（交渉記録抜すい）であり、なおかつ「実績測定を勘案し貴組合単位でその効果を測る」（同抜すい）としているように、「退職」「休職」「出向」が有効に出なければ「雇用安定協約」の存続はないというものである。

従って、動労革マルは、動労組合員の中から「出向」「休職」等を名目とした「首切り要員」を選抜し、当局に差し出すことはもちろん、「雇用安定協約」を破棄した動労千葉や国労組合員をより多く「指名解雇しろ」と当局に要求しているのである。
すでに本紙でも報告した通り、全国の職場で革マル分子を先頭に、自らの組合員でもある高令者の暴力的追い出し「首切り策動がすすめられているのだ。」

革マルの本質を露わにした
「西明石事故」への反労働者的対応

ひばな
8
11.5
関東地方評議委員会
組織内外の糾弾の声、
自を黒と言いくらめ、
自らの裏切りを居直る
ファシストの所業。
鉄労と共に早く首切り「三本柱」(10~15万人首切りの突破口)を片仕切りし
ておいて、「首切り」を認めたのは国労だ、
「今こそ国労組合員を鉄輸旗へ結集させ……」と居直り、組織破壊攻撃を策す動労「本部」革マル。(「ひばな」84・11・5号)

動労「本部」革マルが真正正銘、労働者の敵であることを示す特徴的事態について明らかにする。
去る十月十九日、西明石駅構内で特急寝台「富士」の脱線事故が発生したが、乗務員の所属する動労はどのような対応を行ったのか。
中央闘争委員会のアピール（要旨）十月三十一日

- 動労全組合員に訴える
1. 事故原因は乗務員の酒気帯びによる速度オーバーであり、後続乗務員も飲酒していたことが明らかとなった。この衝撃的事態に組織として陳謝し、再出発の決意を明らかにする。
 2. 動労の「骨身を削った」苦闘の成果を、今回の事故は一挙に瓦解させ無念である。
 3. これは組織への甘へを拭いきれない組合員の弱さであり、その甘えを克服できない組織の弱さである。

なんと、動労「本部」革マルは事故問題の本質が当局の運転保安対策軽視の合理化強行にあることに何ひとつ触れることなく、動労全組織をあげて乗務員組合員に責任をなすりつけ、「職場規律の厳正」を主張しているのである。
まさに「事故」を利用し、特別査察を行い「飲酒の実態」なるものをマスコミ発表し、監視、タレコミ、投書等で職場規律攻撃を強め、職場の力関係の逆転を狙う当局に労働組合の名をもって手を貸しているのだ。
十月二十九日、動労「本部」は「西明石事故」で当局と協議し、謝罪するとともに今後の対策として次の内容の話し合いを行った。

- ① 乗務員としての自覚とモラルの高揚を図る。
- ② 出先地の電話点呼は廃止し対面点呼に改める。
- ③ 乗務員の出先地での時間帯、折返し間合を見直す。
- ④ 深夜における要注仕業の添乗を強化する

以上見ても明らかのように、動労「本部」革マルは十万人首切り「分割・民営化」攻撃の先兵であり、そのためには徹頭徹尾労働者を犠牲にし庇とも思わぬ反動分子である。

「60・3ダイ改」粉碎の闘いを爆発させ、動労「本部」革マルの追放・一掃をかちとろう。(一)

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！